

【優秀賞】

タイトル：私の祖父

生徒氏名：武田桃果

私の祖父は、六十歳の時に突発性難聴という病気をわずらい、両耳の聴力を失ってしまいました。

その時、まだ小学校一年生だった私は、なんのことか理解出来ず、ただ前よりも耳が遠くなっただけと思っていました。なぜなら、大きい声で話しかけたら、相づちを打ってくれたり、返事を返してくれるので、そう思ってしまったのです。

しかし、その事を知った今は、違います。最初は、とてもショックで後悔しました。もう耳の聞こえない人に話しかけて、理解できず、返事もどう答えていいのかわからなく、逆に、祖父を苦しめていただけなのでは？と思ってしまい、一時話しかけるのをやめてしまったのです。

しかし、私の祖母や母、妹たちは違いました。理解できないかもしれないけれど、大声で身ぶり手ぶりもつけて話しかけたり、筆談でコミュニケーションをとったりするなど、祖父とコミュニケーションをとっていました。祖父も笑顔で応えていました。

それを見た私は、思い直しました。祖父はいつも話しかけると笑顔で応えてくれる、ということは、話しかけられてうれしいのではないかとそう思い直しました。

それ以来、普通に話しています。伝わりにくい所は、身ぶり手ぶりと筆談で伝えていきます。

ある日、祖父と話している時、ふと疑問に思ったことが。それは、最初の方に書いてあった通り、話しかけると相づちを打ってくれたり、返事を返してくれる。それは今でも変わりません。耳が聞こえないはずなのに、どうしてなのか。祖母に聞いてみたところ、祖父は、場の空気や相手の口の動きを見てなにを話しているのかを判断して言っているそうです。自分の言っていることは、なんとなくわかるみたいなので、相づちを打ったり、返事ができるそうです。

それを知った私は、祖父はすごいと思いました。以前の私なら、苦労しているんだな。やっぱり話すのをやめようかと思ってしまうかもしれません。しかし、今の私は、独自の方法でコミュニケーションがとれる祖父はすごいと心から思いました。

障がい者であろうとなかろうと、喜怒哀楽などの気持ちは持っています。最初から、言っても伝わらない、理解できないなどと思ってコミュニケーションをとらないでいると、相手の気持ちがわからず、相手がかうしたいなどの思いもわからないまま、自分の思い込みだけで終わってしまいます。また、相手によかれと思ってやっていることも、実は、相手にとっては迷惑だったということもあります。

しかし、伝わらないのなら、伝わるようにしようとか理解できないのなら、理解してもらえるようにしようというふうに前向きに考えると、コミュニケーションがとれて、新た

な発見があるかもしれません。また、そうすれば、相手のために、自分がどういう行動をすればいいかわかります。

たとえ、相手が障がいを持っている人でもコミュニケーションをとらないと、どう思っているのかわかりません。相手もそれに応えてくれます。私の祖父のように、独自のコミュニケーションを使って、会話ができるかもしれません。

私は、最初、障がいを持っている人を偏見の眼差しで見っていたのかもしれません。ただ普通の人と違うから、それだけの理由で。

でも、祖父や祖母、私の母、妹達を見て、それは違うと思いました。祖母や母、妹達は偏見も先入観もなく、普通の人のように接していました。祖父も祖父で、障がいがあるからといってそれに甘えたりもしませんでした。障がいのある人は、私達とは違う、と切り離すのではなく、障がいのある人は、私達と同じ、ただ特徴があるだけだと思うようになりました。

祖父と祖母は今、元気に毎日を過ごしています。この間、祖父の誕生日があったので、みんなで手紙を送りました。それを見た祖父はとても喜んでいと電話で祖母が教えてくれました。

障がいがある人とコミュニケーションをとるのは、ちょっと難しいです。でも、コミュニケーションがとれた時は、なんだ、障がいてなんでもないじゃんと思うと思います。

私は、祖父のおかげで、コミュニケーションの大切さに気づきました。